斜め35度右後方からその声はした。

清水澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
斜め３５度右後方からその声はした。

【Ｎコード】
Ｎ９８０３Ｚ

【作者名】
清水澄

【あらすじ】
過去の恋人の事が忘れられない主人公、そんな彼女にアプローチをするものの彼も彼女の忘れられない過去に振り回されて・・・・惹かれあいながらも、二人の心はすれ違っていく・・・。
Ｒ１５はたまに、コメディタッチで時々シリアス。そしてちょっぴり切ない恋愛ものを目指してます。
最後は、ハッピーエンドの予定・・です。

1

斜め３５度右後方からその声はした・・・。

おれ・・・お前のことがすきだ・・・・。

モニターの音が響く夜のナースステーション。他の夜勤者はただいま巡視中だ。

私は、せん妄のおばあちゃんの見張りをするために一人詰め所に残っていた、

「ちーちゃん、たいくつですか？」

８９歳のおばあちゃんは軽い肺炎と脱水でせん妄状態にあり夜になると家と病院の区別がつかなくなり、同室者の迷惑になるために深夜まで詰め所で過ごすことが多かった。

「他の人は巡視？」

声をかけられて目をやると、一人の医師がドーナツの箱を手に詰め所に入って来るところだった。

「あれ？今日から夏休みじゃなかったけ？」

「気になる人がいたからちょっと顔を出したんだよ」

同期入職の彼は、ローテートで外の病院に出ていたのを先月帰ってきたばかり、頭もよく人柄もそれなりで、見かけもそれなり、しかも独身の３１歳　若い看護婦の人気をさらっている。

なのになぜか、浮いたうわさのひとつもない。詰め所に差し入れを持ってくる暇があったら、彼女でも作ればいいのに・・、などといらないおせっかいを考えつつ、もってきてくれた差し入れをありがたく受け取り思った事を口に出してしまう。

「夏休みだというのに、デートする相手もいないなんてかわいそうにね。」
「・・・・・これからつくるからいいんだよ。」
そっぽを向きながらやや不機嫌に返事をする彼に苦笑を交えながら言った。
「まあ、おかげで差しいれいただいたし。ありがとうございました。」
「・・・現金だな、あいかわらず・・・」
円いテーブルの向かい側に腰掛けながら、電子カルテを立ち上げるしぐさをなんとなく見ていた。気になる人って、そんな重症の患者なんて今いたっけ？
　考えていると、彼がカルテの画面を見ながら言った。
「今日は、定時で終わるの？」
思わず、ききかえした。
「？・・・なんで・・・？」
「終わったらラーメン食べに行かないか？」
「・・・・・・・・・・・いいけれど。今日の夜勤者に・・・誰か誘いたい子がいるの？」
私の問いかけにカルテに視線を落としたままで、軽く眉をしかめた後低い声で返事が返ってきた。
「お前一人なら、おごるぞ？」
　わあ！ラッキー！！　給料日前で今月は特に厳しかった。とっても助かる。
「いくいく！！どこまでも！！なんなら飲み付き合ってもいいよ！・・・て、どうしたの？なんか悩み事？相談？　よし！お姉さんが聞いてあげよう！！」
お前のほうが年下だろう・・・。と苦笑いしながら彼は返事をする。そういえばローテート前はよく飲みいったよね。と、私もご機嫌に返事を返した。
　・・・と、しょうもない会話で、うっかり目を話した隙に、行動

監視中のおばあちゃんは外にでようとしていた。
「あー　ちーちゃんここに居てくれるかな」
立ち上がろうとしている患者さんの、車椅子の前にひざまずき、したから顔を覗き込んで視線を合わせる。
「おなかすいたの？おかしもってこようか？それともお茶飲む？そういえば、日置先生にもらったドーナツがあるからこっそりいただこうか？」
にっこり微笑みを返してくれるおばーちゃんの笑顔に、悩殺されながら、お茶とどーなつを取りに行こうと立ち上がろうとしたそのとき・・・。

「おまえのことがすきだ・・・。」

その声はした・・・。斜め３５度右後方から・・・。

2

「・・・・・!?・・・・」
・・・なんか聞こえた?
・・・・・・いやいや幻聴?
・・・・・・・・空耳?
・・・・・・・・あっ!わかった!ちーちゃんに言ったのね。
すこし、不安におののきつつ声の主を首を回して、ゆっくりと見上げる・・・・。
奴は、少しの動揺も見せず、クールな笑顔で私の耳元でささやく。「放射線科側の出口の駐車場に車を止めている、ラーメン食いに行くよな?逃げるなよ?」
唖然とする私からすばやく離れた彼は、巡視を終えてドアから入ってきたスタッフに、差し入れ持ってきた、とドーナツの箱を指差して笑顔で去っていった。
・・・・ナニガオコッタンダ・・・・・。

時刻は、午前1時。
私は速攻で申し送りを済まし、他のスタッフに挨拶をして、更衣室で急いで着替えた。
もちろん待ち合わせの場所など目指すわけもなく、指定された駐車場から一番遠い出口を目指して走った。
パートナー的な存在が不必要だと思っているわけではない、独身主義でもないが、気持ちが付いていかず、必要以上に親しくなろうとする相手は遠ざけてきた、今もその主義は変えるつもりはない、彼がどういうつもりか今ひとつ図りかねるが、危ない橋は渡らないに限る。

今はとりあえず逃げてなかったことにしてしまおう。
長い廊下を抜けて、ほっと一息ついて夜間ロックのかかっているドアにカードキーを通し外に出た、

・・よしよし・・人影はない、そっと辺りを見回しつつ、タクシーを拾うために構内をでて大どうりに出ようと歩み始めたそのとき、後ろから腕をつかまれ引き戻された。
「・・・・!!うぇ!!!」
「・・・・相変わらずだな・・・その色気も何もない驚き方やめろって・・・」
「・・・なんでここにいるの?」
聞き覚えのあるその声に私は目を瞑り、顔を上げられず首をすくめながら問うた。
「・・・それは・・・、俺のせりふじゃないのかな? 君こそなんで待ち合わせた駐車場から一番遠い出口から出ているのかな?」
「・・・ちょっと、道をまちがえた・・・・かな?」
言い訳をしながら首を回してそっと薄目を開けると・・・そこには・・・
これ以上にないぐらい、素敵な笑顔で微笑む彼がいた
・・・そして、明らかに怒っているであろう低い声で、彼はのたまわれた。
「・・・ふ~ん?・・・・。この病院に6年も勤めて、寮にも入っていた君が、この病院の構内で迷うことがあるなんて・・・・ね?」
・・・・誰か助けてください!!。
逃げ腰になっている私に 今度はこれ以上にないぐらい優しいまなざしを向けて彼は言った。
「貴重な時間を、こんなところでつかってもなぁ。・・」
独り言を言いながら、私の手を引っ張りつつ、構内の道路に止めてある車に向かった。
あっ・・懐かしい、まだこの車に乗ってたんだ。

私の視線にきずいたのか、はにかみながら言った。
「ちょっと目的があって、車にまで資金が回せなかったんだ」
研修医のころにバイトに行くのに必要だからと、中古車ショップで購入していた軽自動車、冗談で私がグリーン色がいいといったらその色を購入していた。彼はそのころ同期の中では一番私と気があって、頼れる仲間だった。ローテーションで疎遠になっていたが、大事な友人の一人だという事に変りはない。
そんな、友情を育んだ思い出の一ページを振り返って良い気分でいる私の気持ちを察知せず。早く乗れよ！！と、助手席側のドアを開けて彼は私を車の中に押し込もうとする。
ちょっと、いたいって！！そうだ、こいつは、大事な友人でもあるが、思い込んだら自分の道を周りも見ずに突っ走る迷惑極まりない奴でもあった。

無理やり押し込まれしぶしぶと助手席に座った私のシートベルトを締めて内側からドアロックまでご丁寧にかけてドアを閉めて、奴は急いで運転席に乗り込んだ。
「・・・・ずいぶん親切にしてくれるのね・・・・。」
訝しげな私に、涼しい顔で彼はのたもうた。
「当たり前だろう。自分が乗り込んでいる隙に逃げられたら、目も当てられない。どんだけ、この日を待っていたと思うんだ！」
・・・・？！　ドンだけ親切なんだろうと思ったのは、逃げるときに時間がかかるようにするためですか？
私が唖然としている間に、車はすべりだした。
「・・ねぇ？」
前を向いたまま、奴は返した。
「？　なに　？　帰るって話は聞かないぞ？」
「・・いや？　そんなに、一人でラーメン食べるのいやだったの？」
「・・・・・はぁ！？」
目を見開いて、ゆっくりと奴はこちらを見た。

ちょっと!運転中!!危ないって!!
　大きなため息をつきながら、前を見て、まったく・・とか、どうしたらいいんだ・・。
とか、ぶつぶつ言っている。
そんな彼を見ながら私は考えた。友情以上のものがあるんだろうか？いや、以前から彼は読めない奴だった。いろんな女性がモーションかけていたが、意に介さずわが道を行っていた人だ。私の勘違いの可能性も高い。そんな勘違いで、彼にいやな思いをさせるのもどうかと思う。
「おまえ、あしたから5連休だったよな？」
・・・よく知ってますね。まあ隠してたわけでないけれども。
返事をせずに黙っていると、
「貴重な、連休だよな？」
・・・？　何が言いたいんだろう？と、思わず顔を見ると、
にっこりと、悪魔の微笑を浮かべる横顔が見えた。・・・なんかいやなよかんがする・・・。
「時間はあるし、ゆっくり飲もうか？」
・・・・それは、友人としての、純粋なお誘いですよ・・・ね？

3

気がつけば、なぜか彼のマンションにいた。夜中に安くでゆっくり飲めるところはここだろうと、押し切られた。
　まあ、昔はよくよっぱらって皆と雑魚寝をしたから、初めてのお泊りではないけれど・・・、この状態で、この時間に、ここに来るのはかなり御遠慮したかった。

最近越してきたんだ・・と言っって案内してくれたそのマンションは、どう見ても、一人暮らし用でない。４ｌｄｋで賃貸でなく、お買い上げだそうだ。
・・そうですか、そりゃねあんたの給料だったら、買えるかもしんないわよね。
「・・・うわぁ～　きれい！！」
リビングから、ベランダが見える。眼下に広がる、見事な夜景！！
思わず声をあげた。
「たそがれ時は、もっと、すごいぞ。」
いつのまにか隣に来た彼が軽く肩を抱いてささやく。
・・・・何するんだ？・・と　軽くにらみつけると、何事もなかったようにキッチンに向かいワインとビールどちらがいい？と涼しい顔で微笑まれた。
ここで、この状態でお酒を飲むのもまずい気がしたので、ノンアルコールのものがいいと伝える。
「・・・・酒飲みのお前が、ノンアルコール？・・・・何か予防線張ってるのか？俺ってそんなに信用されてないか？」
ちょっと傷ついた顔をして返された。やっぱり私の思い過ごしかな？それになんか有るなら、今まで一緒にいた時間の中でとっくにどうにかなっていただろう。
「ロゼある？」

もちろん、・・と返事が返り、冷えたワインと、グラスと、おつまみを持ってローテーブルの上に置いてくれた。座ると夜景が見えないのが残念だが、椅子より床に座るほうが私は好きだ。彼が持ってきた大きなクッションにもたれくつろいでしまった。
・・・・・自分が怖い・・。
隣に座ったら殴ってやろうと身構えるワタクシの期待にはずれて、彼は向かいに腰をおろした。

「このまま、子供が出来てもすめるね。」
空腹にワインなんぞをいただいてちょっといい気分になった私が軽口をたたいた。
「その前に、嫁もらわないとね」
あさってのほうを向きながら、まじめに、彼が答える。
「誰かいるんじゃないの？こんな、妻帯者用のマンション購入して？結婚フラグたってるるじゃない？」
「・・・いるよ、手に入れたい人が・・・・。」
真剣な顔をして、こちらを見た。
・・・・いやな空気が流れる・・・。思わず身をすくめた。
「・・・だったら、私なんかにかまってないで、その人さそえば？」

彼に好きな人がいたとは、初めて知った。もっとも3年も離れていたのだからきずかなくても仕方がない。そうか、好きな子がいるのかと少しショックを受けて、それでも幸せになって欲しいと、彼を見た。
「どんな子なの？」
私の問いに、下を向いてため息をつきながら彼はいった、
「・・・多分、まったく相手にされていないんだ、俺のことを、かぼちゃか芋だと思ってる。男としても認識していないと断言できる

ね」

・・・その話を聞いてかわいそうになった。もともと私は彼は嫌いではない、むしろ友人としてとても大事に思っている。幸せになって欲しい。そんな友人が、好きな人に異性として感じられていないなんてとても同情をしてしまう。そりゃどこかでストレス発散もしたくなる気持ちもわかる。だが、わたしでは愚痴の相手ぐらいにしかなれない・・・。

「私相手に、女性心理を聞きだそうと思っても無理だと思うよ？だって私は世間一般とかけ離れてる自信があるもの。」

・・・ほんとにね、・・と溜息交じりに彼はつぶやいた。

どっちにしても、ストレスは私に向けられても困る。発散の対象に私が選ばれていることは、ちょっと不服だが、わらをもつかむ心理はわからないでもない。

顔はそんなに悪くないと思う。なまじっか当たり障りのない性格をしているのも、問題なんだろうか？世の中マニアックな好みの人が多いからな？

いやいや、実は　やさしいんではなく単なるヘタレだってことに先に気づかれたとか？優柔不断で決めきれない性格してるしなぁ・・・それに、みょ～なとこ細かいし・・思い当たりは、いろいろあるよね・・・。

男として認識されていないって・・・・。なんか、モーションはかけているんだろうか？でもそんな相手だと手も出しにくいだろう。それだったら、まだ男として嫌われたほうがましかもしれない、男と認識されるだけ・・・。男と認識されていない相手に自分の性別を認識させる方法なんてひとつしかないと思うが、この一見周りを見ずに突き進むところもあるが、肝心なところでへたれてしまうこの男にそれを実行する勇気があるかどうか・・・・。

などなど、彼が私の心の声に気づいたならば、本格的に傷つくだろうな・・・

という内容のことを頭の中で考えつつ彼を見た。
わたしの、心の声に気づいたのか、彼はいった。
「・・・なんか、不本意なことを考えられてる気がする・・・・。」
「いやいやいや、そんなことはないですよ？ほらほら、お姉さんが聞いてあげるから
どんどん吐き出して頂戴よ。ほらここに座って！！」
「・・・・・だから、おまえは年下だろうって・・・・。まあいいか、・・よこすわっていいのか？」
ぺしぺしと、自分のとなりをたたく私を見ながら彼はいった。
「向かい合わせだとお酌しにくいなと思っていたのよ。　今日は一晩中付き合ってあげようじゃないの！」
のそり、と彼は移動した。・・・？いやでもそんなに密着しなくても・・・。確かに隣にとは言ったけれど・・・。いやいやいや、思う人に思われず人肌恋しいのかな・・と解釈してあえて異論を唱えなかった。

・・・・はい、浅はかでございました。・・・・・

殆んど私を抱きかかえるような形で密着した彼の行動をあえて無視し、わたしは温かい視線で相談に乗った。

「でも、聞けば聞くほど、困った人だね。」
本当に、聞けば聞くほどあきれてしまう。
その人と彼の関係は６年にも及ぶという。私もまったくきずかなかった。私たちが友情を育んでいたときに、彼は彼女に対する恋心を育んでいたらしい。でもいったい誰だろう？上手に隠したものだ。

もっと早く相談してくれれば良いのに。本当に友達がいのない人だ。
「・・まあ、おれも、冷却期間をおこうかと思って連絡取らなかった時期もあったんだ。
周りの女性に気のあるそぶり見せた時期もあったけれども、まったく反応なかったし」
　まあ飲んで、・・とグラスにワインを注ぐ、話を聞くうちに、ロゼから始まり、白、赤、と3本目のフルボトルが空いた。
　宅配の、ピザをつまみながら、私は涙目になっていった。
「しんちゃん。けなげだね。」
彼は、４本目出そうか？と聞いたが、私はかぶりを振った。
「いやいやいや、飲んでいる場合ではないって。どうにかして、その人を落とそうよ。でないと安心して飲んでられないよ！！」
こんだけ飲んで、飲んでる場合じゃないって・・お前ドンだけ酔ってんの？・・・というため息交じりの声が聞こえた。
「どうしたら、俺の気持ちに気づいてくれる？」
覗き込むように、真剣な目で聞かれる。
うんうん、かわいそうにね、いい加減落としたいよね、切羽詰るよね。と考えながら、彼の真剣な瞳をぼっと見ていた。

・・・・・あれ？・・何か違和感を感じる・・。酔った頭で、違和感の正体を考える。

「無理やり、押し倒そうかと思った時期もあったけれど、そんなことして傷つけるのも違うと思って出来ない・・・」
そのせりふに思わず叫んだ。
「だめじゃない！！ヘタレ！！」
目を見開き、のけぞってる彼に私は言い放った！！少し・・、いや、かなり私は出来上がっていた・・。
「６年だよ！！６年！！男として認識されていないんでしょう！！！後はもう、自分が男だって、無理から認識させるしかないじゃな

い。すきだって言っても聞いてないんでしょう！？後は押し倒すしかないよ！！！」
唖然としてこちらを見る彼に私はここぞとばかりに続けた。
「いつもいつもそう！！一見わが道行ってる様に見えるくせに肝心なところで引いてしまう！！だからいっつもリーチかかってるのに、大事なものに限って手に入れ損ねてるんじゃないの！？そういうのなんていうか知ってる？ヘタレって言うんだよ！！一度くらい勇気出してチャレンジしなよ！！」
あたって砕けてしまえ！！と叫んだ私を見つめて、彼は砕けろは余計だ！と言った。

そしてしばらく私を見つめていた。どのくらい時間がたっただろう・・。見開いていた目を閉じて、こめかみに手を当てて、ため息をつきながら彼はいった。

「・・・・そうだな、すきだって伝えても幻聴扱いだもんな？あのシュチュエーションで、何でおれが　ちーちゃんに、告白せんといかんのだ？」

横にいた彼との距離が縮まった。腕をつかまれた。

「・・おまえ・・・、これだけ言っても、自分に心当たりはないのか？」

酔いが一瞬でさめた。今私、何か非常にまずい事をいった気がする・・・。

「・・・え～っと？宴もたけなわでございますが、わたくし、長居をしているみたいなので・・・そろそろおいとまを・・・。」
立ち上がろうとした私を逃がすものかと片手が抱きしめ、あいた

片手がゆっくりと私の顎を捉える。
「5連休だったよな？奇遇だな？俺もだよ」
よかったですわね、と逃げようとしてみた。・・・でも逃げられない。やな汗がでる。
「お前言ったよな、後は押し倒すしかないって・・・・。」
いやいやいや言ったような、言わないような・・・それはワタクシ除外ということでお願いしたいのですが・・？。
「お前の助言どうり、肝心のところで引いてしまうヘタレは卒業する事にするよ」
彼は私の頬をなでながら続けた。
「ゆっくりと、俺の性別が、雄だってこと認識してもらうよ・・それから、いろいろ相談することもあるしな・・・」
いやいやいやいや、ちょっとまってくださいな・・。
「・・・自分の発言の責任は取れよな。」

奴の唇が、わたしのそれにゆっくりとかさなった・・・・。

4

なんで、私はここにいるんだろう・・・？
「おはよう」
唖然としている私の唇に、軽いキスを落としながら彼はさわやかに微笑んだ。
「トースト、チーズのせる？バターは？」
「・・・・両方」
さわやかに微笑む、彼に答えながら、ベッドから降りた。なぜかパジャマは着ている、自分で着た覚えがないということは彼が着せたのだろう。腹立つぐらい、紳士だ・・・いやいや・・紳士だったらあんな暴挙に出ないだろう！！

・・・・！！！ダマサレテハイケナイ！！！・・・・

・・・・確かにあおったのは私だが・・・・。

「卵はどうする？目玉？スクランブル？」
「チーズオムレツ！！」

キッチンから、笑い声が聞こえる。むぅ・・悔しい、嫌がらせになってないようだ・・。
着替えを探すが、見当たらない。たずねるのも悔しいので、パジャマのままキッチンに向かった。
「皿とって」
言われて、差し出すと、湯気のたったきのこのチーズオムレツが乗った・・。悔しいほんと嫌がらせをされてるのは私のようだ・・・。
「・・・きのこすきだろう？」

じっと皿をにらみつける私に気づき、彼はいった。
「・・・嫌いじゃない・・・・・」
悔しいので、そう答えた・・・。くそうぅ・・・笑うな・・・なんでそんなにご機嫌なんだろう？
「パジャマ、だいぶ大きいな？今日必要なものを買いに行こうか？」
・・・・はいぃ？・・
「5日もあるしね、着替えもいるだろう？」
・・・も～し　もしぃ？・・・・
「からだ、きつくないか？初めてだったんだろう？」
・・・・・言うな・・・・・思い出させるな・・・・・・・・・あんたのためにとってたんじゃない・・・・・機会とその気になれなかっただけだ・・・。

「おれは、うれしかったよ、6年我慢した甲斐があった。」
涙目で、にらみつける私の目じりに彼はキスを落とし、・・まあ怒るなって・・俺の性別は認識してくれたよな？ってにが笑いしながらささやいた。
・・・・・いたしましたよ？このなんともいえない場所の違和感と、全身の筋肉痛が、その成果だと思います・・・。

「食べないとさめるぞ」

悔しい、何でおなかはすくんだろう？
悔しい、何でこのきのこオムレツおいしいんだろう！！

ご飯を食べて、おいしい紅茶をいただいた。
「お腹膨れた？」
彼は、極上の微笑を私に向ける・・・。やな予感・・・。
「・・・うん・・・」
「じゃあ、腹ごなしの運動しようか・・？」

・・・　！ちょっとまったぁ！　出かけるって話は！？・・・
「だって、おまえ、まだ隙あらば俺から逃げようとおもってる・・・よね？俺はお前の助言どうりヘタレは卒業したんだ、もう逃がさない」
後ずさりしようとしたが、後ろは壁だった。　逃げ場をふさがれる。
私の願い、抵抗もむなしく・・・ベッドルームに引きずられていった・・・。

別に、バージンにこだわっているわけではない。
結婚まで清い体で、というこだわりもない。
なのにこの年まで？・・とびっくりされるかもしれない。
そんな、機会がなかったといえばうそになる。

「ぜータイヤだ！行きません」
小さいころからずーっと、となりの１２歳年上のいとこの優ちゃんが大好きだった。
お医者になるんだと、医学生になったその人は本当に毎日忙しそうだった。
中学に入り、優ちゃんも医師試験に合格し、お医者になったらますます忙しくなり、あえない日が続いた・・。
あまりにもかまってくれない彼に少しすねて、何で美香と遊んでくれないのと聞くと、自分は不器用だから人の倍努力しないとおいていかれるんだよ、と笑っていた。
　親たちの間では、なんとなく結婚の約束が出来ていた。もちろん

それは、優ちゃんが親に頼んだことで私が中学2年生の夏に申し込まれた。ロリコンだね・・とよく笑っていた、でも美香が高校に行って変な奴に捕まったら、後悔しきれないから・・。美香のバージンは僕のものだからね、と言っては私にどつかれて、それでも笑ってた。

高校2年の夏休み、珍しく休みが取れたので旅行しようと誘われた。もちろん1泊で・・。
当然のごとく、私は抵抗した。
「ゼッタイやだ」
「なんで？」
「恥ずかしいもん」
「なにが？別に良いじゃないか？いまさらだろう？」
でも恥ずかしいし、怖いものは怖い・・。それでなくとも、美香のバージンは僕のものだと公言し、会うたびに押し倒されている、なにもないはずはない。
「美香が嫌がることはしないって、約束するから・・ね？」
うぅ・・負けそう・・・。いやいやいや
「でっでもまだ、約束の年じゃないじゃん」
「美香は僕のこと信じてないんだ・・。」
いやいやいや・・・そういうことではなくって！！
「だめなものはだめっ！　」
何であの時、一緒に行かなかったんだろう・・。
何で、もっと上手にもう少し待っててっていえなかったんだろう。
あのときの、優ちゃんの傷ついた笑顔が忘れられない。

そして・・・その知らせは、学校に届いた。

「橘！お母さんが迎えに来ているから、すぐ帰れ！」
私は、優ちゃんの申し出を喧嘩別れした形で断りクラブ活動に出ていた、
母が何で？教室を出ると、真っ赤な目をしたお母さんが震える声で言った。
「美香、すぐ来て・・」
・・・怪訝な顔で、母を見たが、詳しいことは教えてくれない。仕方がないのでついていった。いやな予感がした。
母は、私をタクシーに押し込んだ。何で自分で運転しないんだろう？
1時間ほどして、救急病院にタクシーが着いた。
母は、痛いぐらいの強さで私の手をつかみ廊下をかけた、病院だし廊下は歩かないと・・・。などと、妙に覚めた目で私は母を見ていた。

外科病棟の病室の前で母が止まった。

「美香を連れてきました・・」
ドアが開き、おじさんが出てきた・・真っ赤な目をして・・・。
その向こうに、おばさんが座り込んでいる、ないているようだ・・・。
誰かが、ベッドに寝ているようだ、でも、器械と包帯だらけでよく見えない。
お父さんが、私を後ろから抱きしめてくれた。何か言っているがよく聞こえない・・・。

優ちゃんがいない、いつも、美香が困ったときには必ず大丈夫だよっていってくれるのに・・・。どこにいるんだろう？おかしいな？こんなときほどそばにいてほしいのに、何してるんだろう？
お父さんが何か言ってる・・・？聞こえないって！！お母さんが何か言ってる？聞こえない！！ゆうちゃんはどこ？優ちゃんはどこ

？ねえ？誰か教えて？意地悪しないで？

！！！！！！！！！！！！！！！！！いやだ！！！！！！！！

周りが真っ白になった。

無免許の飲酒運転だったらしい・・・。
横断歩道で信号待ちをしていた、優ちゃんに突っ込んで行ったと聞いた・・。
何にも悪くないのに・・・。
お医者さんになりたてのとき、自分の持った患者さんのおばあちゃんに、プロポーズされたけれど、美香がいるからって断ったよってうれしそうに言っていた。
私も、看護婦になるっていたら、じゃあ将来は二人で田舎に行って開業しようね・・ってうれしそうに言っていた。
優ちゃんのうそつき・・。
美香のバージンどうしてくれるのよ？
美香死ぬまでバージンじゃんか！
責任とってよ！！！今すぐ帰って来い！！

誰かにゆすられて、目が覚めた・・。
あれ・・・？
「ちょっと、だいじょうぶか？・・ごめん、気がついたか？」
覗き込んでいる、心配そうな瞳、コノヒトハダレ？ユウチャンナトハカオガチガウ・・。

私が、怪訝そうな顔で見ていると、奴はあせった顔で
「・・・本当に大丈夫か？　俺が誰かわかるか？」
・・・・・・・えぇ・・えぇ・・わかりますも。私が育んでいた友情を粉々にした、日置真一・・・。手籠めにしただけではものたりず、軟禁して、おもちゃにしてる。
「・・・・・・なんかものすごく、俺にとって不名誉なこと考えてない・・・・？。」
・・・事実じゃない！！性別認識だけなら、一回でいいじゃないですか？なんでこんなに何回もいたされているの？　自分が彼を煽った事実は棚上げして、彼を睨みつける。
「ゆうちゃんてダレだ？おまえ、ひとりっこじゃあなかったけ？」
「・・・・・言いたくない・・・聞かれたくない・・・もう帰して・・」
ため息をつきながら、彼は言った。
「まだ、俺の気持ち認識できない？」
「・・・・あなたの気持ちじゃなくて、私の気持ちの認識は？」
ゆっくりとこちらを見てしばらく考えて、頭を抱えた後・・・ベッドから降りた奴は服を着ながら、振り向かずに言った。
「・・・・わかった、送る。この事は謝る気はないからな？」
そんなことはどうでもいい、私はここから帰りたい。５連休は優ちゃんに会いに行くためにとったんだ・・・。

・・・デモ、ユウチャンハモウイナイ・・ミカヲ　ダキシメテモクレナイ・・・。

急に私の中で現実が迫ってきた。・・そうだ、あんなにがんばってバージン守ったのに何でこんなことになちゃったんダロウ・・・。
「ゆうちゃん・・どうして、みかをおいていっちゃたの？　美香のバージンなんでこんなヘタレにとられたの？」
泣き崩れる私を、彼は優しく抱きしめながら、・・・ごめん・・っ

てつぶやいていた。
！！！やっぱりへたれじゃん！！あやまるぐらいならヤルなっつ！！謝られても、処女膜は再生しないんだよ！！バカヤロウ！！
私の心の声が聞こえたのか、己の所業をいまさらのように反省したのか、彼はずっと、私を抱きしめたまま、謝り続けてくれた。
そして、その温かい腕の中で、泣き疲れた私はいつの間にか眠っていた。

結局、５連休は、彼のマンションで過ごす羽目になった。

もちろん、３食昼寝付き、セックス抜きだ。

お食事？そんなん私が作るわけないでしょう？ここぞとばかりに、こきつかってやりました！。
奴の料理はオムレツ以外も絶品だった。

・・・・・・私って・・・・。

5

連休が明けて、仕事に出かけた。
　おばちゃんに、帰れなかったことをわびたが、電話の向こうで、いいのよ美香ちゃん、でもお嫁に行くときは、おばちゃんにも美香ちゃんから報告してね。・・と言われた。
・・・相手もいないのに、どうやって嫁に行けというんだろう。

連休明け、私は勤務につくために病院の廊下を歩いていた。
「おはよう、」
耳元で声がした、心臓に悪い・・・。普通に挨拶できないのだろうか・・・。
「・・・・おはようございます、お元気でしたか？」
　ずっと一緒だったのに？・・・と言うような彼の視線を無視して私は詰め所に向かった。
詰所に入ると、ちーちゃんがいた。夜遅いちーちゃんがこんなに早く詰所にいるのは珍しい。
「ちーちゃんどうしたの？朝から？」
「う～ん、それがね・・・」
？？？深夜勤の看護婦の歯切れが悪い・？何があったんだろう？
　横をすり抜けようとした私の手をつかみ、ちーちゃんが言った
「真一さんをとらんでくれるか？」
・・・・・・！？　はぃい？？・・・・・
「こないだ、ぷろぽーずされとったじゃろ？」
・・・・・・・！！　はいいぃ！！？？・・・・・・
ゆっくりと、深夜勤務者に目を向けた・・・。曰く5日前からずっと私に言いたいことがあるからあわせろの一点張りだったそうだ。

そういえば、主治医だったよな・・？
その”真一さん”が詰所に入ってきた。ちーちゃんは、その手を握り締めながら言った。
「あんな小娘の、どこがいいんじゃ！！」
苦笑いをしながら、奴はこっちを見てのたもうた、
「おれを、男認定していなかったのお前だけだったみたいだな・・・？　いや、雄としては5日前に、体で認識してくれたんだっけ？」
いや～～～～、うそ～～～　どういうこと～～～　という黄色い声が、詰所の中に響き渡り、私は、今日なんで仕事なんだろう・・・と軽くため息をつきながら、この騒ぎの原因を作った彼をにらみつけた。
その視線を、彼はスルーして、お部屋に帰りましょうか？、とちーちゃんに微笑を返していた。
だめ！ちーちゃん　だまされないで、そいつはヘタレの悪魔よ！貞操の危機よ！！
私の心の声もむなしく、ちーちゃんは、奴に車椅子を押してもらいご機嫌だった。
仲のいい看護婦の都に襟首をつかまれた私は、ため息をつきながら聞いてみた。
「聞かなかったこと、なかったことに出来ない・・・？」

・・・・無言・・・・・

「・・・わかった、主任、詰所内の収拾に、夕飯1回。」
「・・・飲みにして・・・・。」
「・・・わかりました・・・・」
襟首を離して、都は周りを見回し、申し送りを始めます！準備はいいの？！　と静かに言った。
一瞬で詰め所の黄色い声は静かになった。・・・さすがだ・・・。
事の顛末を、いつの間にか戻った彼は涼しい顔で入り口で眺めた

後、どこかに去っていった・・・。

あなたが払えよ、！！飲みだい！！！

騒ぎから2週間、何事もなかったかのような静けさを病棟は、取り戻した・・・。

変わったことと言えばこの2週間、私は彼と必要最低限のことしか喋らず、彼のほうもそうしていたと言うことだ。

明日は、公休日　私は病棟主任である都との約束を果たすために、いつもは行かないこじゃれた飲み屋にいた。

「・・・で？　　何があったの？」

店に入り、オーダーを頼み、日本酒を飲みながら、都がいきなり切り出した。

「・・・もうほとぼり冷めたし、その話はいいじゃん・・・」

「・・・・・・私が押さえてるに決まってるでしょう！？それとも？無責任な噂を放置しましょうか？」

・・・・それは困る・・・非常に困る・・・・これでもアタクシはこの職場が気に入っているんだ。

「・・・・・・夏休みの前の準や勤務の日に、日置先生が差し入れを持ってきてくれたのよ。そのときに、ちーちゃんが詰所にいて、ちーちゃんと喋ってたら・・・」

「・・・・・たら？」

「後ろから、好きだ・・・って、・・・・・言われたらしい・・・・・」

都が　めをまん丸にして私を見つめた、そしてあきれたようにため息をつくと言った。

「・・・何？その不確定　不確実　他人事のような話は？あきれる

わね？」
私は、都の手を思わず握って言った！
「そうでしょう！！ひどいでしょう！！あんまりでしょう！！」
　都は、そんな私の手を冷たく振り解き、手酌で日本酒をコップに注いでいた。
「・・・・・私が、あきれているのは　あ・ん・た！！」
思わず、声を変えて唸る様に吼える・・・もとい、語る都に慄きながら　恐る恐る聞いてみた。
「・・・・なんで？　私が悪いの・・・？」
驚いてる私に、彼女はあきれた顔を隠そうともせずに淡々と言い放った。
「・・・・あんた、本当に分かってなかったの？　６年前から、日置の態度は回りにばればれだったじゃないの？　本人もまったく隠してなかったし。まあ、ローテートから帰ってきてさすがに大人になったのか、公私をつけれるようにはなったとは思ったけれども、それでも丸分かりの態度だったわよ？同期入職の中ではいつまとまるかって、かけの対象にまでなっていたのに・・・本当に？分からなかったの？」
私は、ぷるぷる　首を振った・・・知らない・・・知るわけがない・・・
・・・ぽかんと口を開けてる私に笑顔で、・・ちなみに、胴締め私ね～～・・と追い討ちをかける・・・。
・・・・友情って・・・？　　人間不信になりそうだ・・・・
　いつの間にか、コップ酒は私の分も用意されていた。明日は休みだったよね、事の顛末の一部始終語ってもらうわよ・・？　と言うささやきとともに・・・。
「んで？　すきだって言われてその後、どうしたの？」
「・・・・・・・・・・・・・べつに・・・・・・・・・・・・」
「　小学生とお話してるのかな・・？ワタクシは？　そんなたわごとで許されるとお思い？」

怖い・・・怖いよ都・・・あの人とか、この人・・どう見ても一筋縄で行かないおじちゃん（教授）達を手玉にとって、病棟をまわしているだけはある。影の番長（師長）だもんね。
一見にこやかに微笑んでいるように見えて有無を言わさないその気迫と、コップ酒の勢いを借りて、私はしぶしぶ白状した・・。
「最初はね、仕事終わったらラーメン食べに行こうって誘われた・・」
都は、3杯目のコップ酒を私に注いでくれた。
「でも、幻聴が聞こえたでしょう？」
都が、半眼で私を眺めている・・・怖いって・・・。
「・・これはやばいって思って、待ち合わせスルーしようとしたら捕まって・・。」
都が首だけで、3杯目を飲めと促した、逆らえない私は指示に従った・・・。
「飲もうかって彼が言い出して店に行くんだって思ったら、家のみが安いからってマンションに連れて行かれて・・・」
都・・・そのガッツポーズは何？今度はあたしが半眼になる・・・。
「・・・・・彼の好きな人がなかなか落ちない、自分の気持ちに気づいてもいない、男だとも思われてないどうしたら良いんだって、相談されて・・」
「・・・・なんていったの？・・・・」
「そんな人は実力行使で男だと言うことを分からせろ！！！　押し倒せ！って・・・。」
「・・・・で、押し倒されたんだ？」
「・・・・・・・・・・・・うん。」
「・・・あの、ヘタレにしてはがんばったよね」
「あ！！都もヤッパリヘタレだと思うよね！！」
本日、初めて私と意見があった都の発言に嬉しくなり私は思わず身を乗り出した。
そんな私の笑顔を無視するように、都は続けた。

「但し、アイツがへたれるのは、あんたに関する事だけだよ。」
「・・・・・へ？」
「あの決断力、実行力、頭の回転の速さ、統率力、あんたも分かってるでしょう？」
「・・・・・うん」
「何で、アイツがマンション買ったか知ってる？」
「彼女と暮らすためだって・・・あ・・・・」
「そうだよ、美香　あんたのためだよ？叶うかどうか分からない思いのために、いつもがんばってる、そんな男だよ？」
・・・そういえば、目的があって、車にまで資金が回らないって・・・。
「ねえ、美香？忘れられない思いがあるって言うのは分かるけれどもいつまでその思い出を引きずっているの？そろそろ前を向いても良いんじゃないの？」
・・・ズキン・・・シンゾウガイタイ・・・。
「思い出の中の人が、美香を抱きしめてくれるの？　守ってくれるの？　」
・・・イキガデキナイ・・ヤメテ・・・。
「ねえ、美香足元を見てごらんよ。今、あなたのそばにいるのは誰？支えてくれるのはだれ？」
・・・胸を押さえながら、思わず私は聞いた。
「・・・・・都・・・あんたは、どの位に賭けたの？」
下を向いた都が思わず舌打ちをしているのを、私は聞いた・・・確かに、聞いた・・・。
「帰ってきてから、２ヶ月以内。」
「・・・・・・・・倍率は？」
「・・・・・・・・７０・・」
「・・・・・・・・一口？・・・」
「・・・・・・・・千円・・・」
眩暈がする・・・いったい何人が参加しているんだろう？　観念し

た都を締め上げて参加者の名前を聞く、教授陣の名前まであげられるのを聞いて、・・・・頭痛までしてきた。
でも、体だけじゃねぇ～～　心もってってくれないと意味ないじゃん・・。ってボソリと言った、都の言葉に温かい気持ちになった私は甘いのかな？ゴメンね心配かけて・・・。

４杯目の、お酒に手をかけた・・・。

「ごめん！！遅くなった！！！」
「・・・ほんと、帰ろうと思ったよ？」
５杯目で、潰れてしまった美香を横目で指しながら、都は声の主に言った。
「・・ごめんって、出ようと思ったら、緊急内視鏡の手伝いが欲しいって言われて、活動性で、止血に手間取ったんだ。」
ビールお願いします・・と注文をしながら、声の主はお絞りで手を拭いた。
・・・さり気無く横に座り、美香？と甘い声でささやきながら、そのささやいた相手のかみの乱れを直してやっている男を都は観察していた。ささやかれた姫はグウスカピーと夢の世界だ。
「ヤッたんだってね・・？」
ビールを思わず噴出しそうになっている相手を見ながら、都は淡々と続けた。
「　ヘタレ返上出来たんだ？」
「・・・・それは、どうだろう・・・」
苦笑いをしながら、男はビールを飲み干した。美香が言ったのか？と男は聞いた。
「・・・あほか！　詰所で自分が言ったことも忘れたの？」
　ああ・・・あれね・・。そんなに、きわどいいい方したっけ？と

平然と返す。
ホントにこの男は、美香に対すること以外だと悔しいほど冷静だ、あれもどうせ他のライバルの牽制にするつもりでわざと言ったに決まっている。
「ちーちゃんがショックで認知症がましになったてよ？いくつになっても女は恋をしないと駄目だよね？」
・・・それ、こいつに言い聞かせてくんない？・・・と　自分の隣で撃沈している女に言葉とかけ離れた優しい目を向けながら言った。
「・・・あ、じゃあ手にいれたのは、体だけで、心は入ってないって、自覚はあるんだ」
「・・・ほんと、遠慮なしだね、おまえ・・・」
「体も、この調子じゃ一度だけの思い出って可能性もあるわよね～～」
「いやもう、二桁には載らないとは思うけれど・・・近いと思う・・・」
「あんた、一晩でなんかいしたの？」
鬼畜！！！と叫ぶ都に、何で一晩だと思うんだ？と返したら、だって、美香が許すわけないじゃん。と返され反論できずに黙ってしまった。
「・・・一晩じゃないぞ？夜中から夕方にかけてだ。」
「・・一晩は延べ2日でしょう？　夜中から夕方なんて1日じゃない？もっと駄目じゃん」
ああいえば、こういう・・・さすが美香の親友だ・・たちが悪い。
隣で寝ていた美香がもそもそと動いた。
「うぅん・・・優ちゃんだぁ、美香を迎えに来てくれたの？嬉しい！」
抱きつかれて、思わず固まる・・・？ちょっと待て？だから？優ちゃんて誰だ！？
ああ～～確かに雰囲気は似てるかもしれない、でもあっちのほうがヘタレてなかったけれどね・・・。都のあまり嬉しくない台詞を聞

きながら、抱きついてきた美香を思わず抱きしめて抱えなおす。
「こいつ、兄弟いないよな？優ちゃんて誰だ」
「・・・知りたい？」
「・・・・・・・・」
「・・・美香が、敢えて公言しないことを、私の口から聞きたい？」
「・・・・・・・・」
「いいよ、教えてあげても？」
「美香に聞くからいいよ。」
都は、にっこり微笑んで。よかったわ・・・と言った。
「ヘタレ返上のご褒美に、美香のお持ち帰りを許してあげるわ。」
ビールを自分のコップに注ぎながら、都は言った。驚いてる僕をちらりと見ながら、但し美香の気持ちは美香のもだけれどもね・・。
といやな台詞をはく。

判っているよ、スタートラインに立つ権利が手に入っただけだと言うことは・・・。
いままでは、その権利さえ持っていなかったんだから・・。
あわてず、確実に、手に入れて見せるよ。・・・ずっと、俺のものにしてみせる。

俺の腕の中ですやすやとねいきをたてる美香の頭のてっぺに口付けを落とした。それを見ていた都が言った。
「続きは場所を変えてください。」
そのままの体制で、僕は都に視線を向けた。そんな僕を見据えて、都は言った。
「・・・・別にあなたじゃなくてもいいのよ・・？美香をしあわせにしてくれる人なら誰でもいいの、今たまたまあなたがいるから頼んでいるだけよ？もし、少しでも美香の意に反することをして、美香を傷つけることがあったなら、覚悟はしておいて・・・・ね？」
こちらを見て静かにそれだけ言うと、都はにっこり微笑んで店員に

お愛想とタクシー2台お願いしますと告げた。

6

～～～～ん～～あったかい～～ふわふわする～～いいきもち～～～

私は、ゆっくりとその感触を味わうとともに薄目を開いた。

大きな腕、温かい広い胸、そして、優しいにおい・・・あれ・・・？

「・・・・？優ちゃん？・・・・」

「だからそれは誰だ？」

聞きなれた声が頭上からする。都は？ここは？

「・・・俺のマンション、水飲むか？シャワー浴びるか？気分は大丈夫か？」

声の主に、唖然とした目を向ける・・なんであんたが？何で私はここに？

「・・・・酔っ払いをつれて帰れないって都が俺にＳＯＳ出したんだ、あいつもかなりよってて、アパートに送っておいたよ。」

それでなんで私は、あんたのマンション？じと目でにらむ私の視線を避けながら、奴は言った。

「都が、お前は飲みすぎたから一晩隣で様子見たほうが良いっていうから・・仕方ないじゃないか！」

なんか・・すごい言い訳に聞こえる・・・。にらみ続ける私の視線をかわしつつ彼は言った。

「それとも。ＥＲで点滴したほうがよかったか？」

・・・・その事態だけは絶対避けたい・・・・・。

「ありがとう、でももう大丈夫だから・・・・帰るわ」

立ち上がろうとして、ふらついた。おかしい、そんなに飲んでないはずなのに・・？

ふらつくあたしを抱きしめるように支えて彼は言った。

「泊まっていけよ、お前の嫌がることはしないって約束するよ。それに、この状態で帰したら俺が都に怒られる」

・・・本当に？・・・ならこの手はなんだぁ？
「・・・・だって、おまえ、離したらこけるぞ？」
「紅茶が飲みたい・・」
わかった。と彼は言い私を軽く抱きしめ（られたように感じただけかもしれないが）キッチンへと向かった。
私は、ローテーブルを前にクッションにもたれて座った。ミルクで良いか？と声をかけられて、うん・・と返事を返す。湯気のたったミルクティーのはいったカップが置かれた。

「・・・・優ちゃんて誰だ？」
「・・・・いいたくない、あなたには関係ない・・」
私の、きっぱりとした拒絶に少し彼は傷ついた顔をした。
「・・・・隣に座ったら駄目か？」
「・・・・どうぞ・・・」
私の返事に、少し驚いた顔をしてそれでも嬉しそうにこちらへ来る・・・くそう・・少し心が揺れる。
　相変わらず、必要以上に密着してくるやつの身体と少し距離を置こうと身体をよじる。
「・・・お前の身体温かいな」
こちらを覗き込む彼の目と私の目が重なった。温かい・・？それは、あなたのことだ。

・・・・・・本当に温かい・・・。生きてる人の温かさだ・・・。
心地よさに身をよじって作った距離が縮まる・・・。
いつの間にか、抱きしめられていた。でも私はこの温かさを離したくなかった。そして私もこの温かさを抱きしめる。

「ほんと、何もしないから・・・。」
頭のてっぺんに、やさしい振動と、温かい吐息を感じながら、いつ

の間にか私は夢の世界にいた。

「きてたんだ。」
「お風呂沸いてるよ？食事はどうする？」
あれから彼は本当に抱きしめる以上のことをせず私を一晩中暖めてくれた。
そして、その温かさと心地よさに味を占めた私は休みの前日は度々此処に通うようになっていた。
　そして、友達以上、恋人未満の、生ぬるい関係が続いている。都のいい加減にしなさいね？と言うため息とともに。
「おかず何？」
「ん～～ホイル焼きと、味噌汁、ヌタと冷奴。」
「風呂入ってくる」
もう時刻は日付けが変わろうとしている、ホイル焼きを焼いているとお風呂から声がかかる。
「お前は食べたの？」
食べた、と風呂場に向かって答える、ビール付き合って？ときかれ、だしとくねと答える。

「～～あ～～うまい」
当たり前のように私の隣に座り私を抱きしめるように抱えながら、彼はビールを飲んだ。そして、私の肩に顔をうずめながら、美香のにおい良いにおいとのたまう。
　いやいやいや、ちょっと引っ付き過ぎでしょう・・・。内心突っ込んでみるが、この2ヶ月それ以上手を出さない彼を信用している

私は黙ってされるがままにしていた。
ビールを飲みながらホイル焼きをつつき、彼は言った。
「おまえ、ＥＲの教授と知り合いか？」
首を回し、彼の顔を見ながらいわれた言葉の意味を考える。
「今日、肝破裂の患者のエンボリを頼まれたんだ、そのとき、教授もいてな？・・お前に手を出すんなら自分の許可を取れと言われた。」
「・・・・・・・・・・。」
「この世で一番大事な娘だから、中途半端な気持ちなら覚悟しろよ、とも言われた。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
「縁戚関係でもなかったよな？」
私の顔をちらちらと伺いながら、言葉を続ける。ただの知り合いにしては、真剣に言われたぞ？ちょっとびびったかな？・・という彼のため息を聞きながら、まだ気にかけていてくれたんだ・・まだあの人の中でも終わってないんだ・・と私は身を硬くした。
「？ごめん？なんか気に障ったか？」
私の変化に気がついた奴は、あわてた声で私に言った。
「なんでもない。何もない。」
質問の答えになっているような、ならないような返事に、彼はそれ以上の質問をせずに黙って食事を再開した。

食事を終えて、飲み足りないのか、私の隣でもう一本ビールのプルタブを引いている彼を私はボーっと見ていた、時刻は2時を過ぎようとしていた。
「まだ、寝ないの？」
ああ、今日は気になることがあったから眠くない・・・こちらを見ずに返事を返す彼の横顔を見ながら、わたしは、言葉を選びつつ話し始めた。

「・・・昔のね・・・知り合いが、槇原教授の下で働いていたの・・・。そのときの何回か、マッキーにはあったことがあるの。私が高校生のときだから、もう、１２年になるのかな？昔は、あんなに怖い人でなくて、優しいおじちゃんだったんだよ？」
彼は私の顔をみて眉をしかめながら・・・お前仮にも教授に向かってマッキーてなんだ？・・・とあきれた声で言った。
「だって、就職してから会ってないし、私の中では、１２年前のマッキーの顔しか思い浮かばないもの。私がつけたんだよこのあだ名？かわいいでしょう？」
微笑む私をビールを飲みながら彼は見ていた。私は言葉を続けた。
「１２年もたったんだあれから・・。私もうすぐ３０になっちゃうんだよね。」

お前それはいきなりでしょう？まだ、２０台でしょうと彼が苦笑いしながら言った。
「・・・ううん・・・あの時はまだ、１６だったんだ。覚悟も何にも出来ていなかったんだもの、どんな言葉が相手を傷つけて、どんな言葉を伝えたら良いかもわかってなかった。だからあんなことになっちゃったんだ・・・。どんなに後悔しても時間は戻らないよ・・・ね？」
　お前酔ってんの？と　居心地が悪そうに彼が言った。それなら今から謝れば良いじゃないかとも・・・そして、なんなら俺が一緒に言ってやろうか？などととぼけたことを言う。
「もう、無理なんだ・・。謝れないのよ。」
横にいた彼にゆっくりと抱きついた。
「あなたは、温かいよね・・・。とっても・・・。こうしているとほっとする。」
抱きついて、胸に顔を摺り寄せる私を、彼はそっと抱きしめてくれた。そして、ゆっくりと背中をなでてくれていたが、そのうちに、

なぜか身をよじった。・・・あれ？
「・・・・？ねえぇ？・・・・・」
「・・・・・言うな・・・・・」
「・・・・何か、異変が起きてませんか？」
「だから、口に出すなって！！！」
真っ赤になってうつむいている彼の顔を、私はまじまじと見つめた。
「治まりそう？トイレに行く？疲れているんじゃないの？何でこんなに元気なの？」
「お前には、男の生理を理解して、さり気無く恥らう気遣いはないのか？」
「・・・そんなん、６年も看護婦して、２８年生きてきた私に求めたって無理よ？まさか、私に収めるのを手伝ってくれなんていわないわよね？　手でも、口でも遠慮させてもらうわよ？。」
「・・・・おまえこないだまで・・本当にバージンだったんか？・・・」
あんたが、無理から奪っといてよく言うわね～～という台詞から逃げるように、彼はトイレに向かっていった。よしよし、自分で何とかしてください。

「・・・・あんたって、鬼ね・・・・。」
都の冷たい視線を無視しながら、事の顛末を都の部屋で飲みながら私は語った。・・・・。
「ホンで、あいつを煽るだけ煽って挙句、　好きな女に擦り寄られて欲情したあいつのぶつを冷静に観察して自分は後始末せずに相手にさせたんだ。」

「・・・なんか、都の言い方ヤダ・・身もふたもないじゃん・・」
「その状況を、どう脚色しろと？」
「まるで、私がろくでなし見たいじゃん」
「ろくでなし以外のなんだと言うんだ！！？　充分ろくでなしだよ？あんた男心を弄ぶのはいい加減やめろよね？どうせ、バージンさ さげた相手じゃない？いまさらでしょう？させてやれよ！！」
「だから、身もふたもない言い方やめてって。それに、捧げてない、奪われたんだって！！」
都は、キッッ！！とこちらをにらみつけ言い放った。
「休みの前日にしょっちゅうお泊りに行ってるくせに今更だよ！！あれから、やってなかったなんてびっくりするわ！！あいつのヘタレ具合と忍耐力に拍手喝さいだね！！」
「だから・・・そんな関係じゃないって・・・。」
まだ言うか！！！！　じゃあ、あいつにかまうな！！きっぱり切って捨てろ！！　奴のために！！それが本当のやさしさだ！！！」
都の剣幕に私は黙り込んだ。そうだ、都の言うとうりだ。わたしは、彼の温かさと彼の優しさに甘えて、優ちゃんにあえない寂しさを埋めようとしている。
「ねえ？美香。」
打って変わってやさしい口調の都の顔を見上げた。
「思い出は捨てる必要はないけれど、思い出はあんたを暖めても抱きしめてもくれないんだよ？今一番大切な人は誰か本当はもう分かっているんでしょう？このままだとあなた、また後悔するよ？」
ひざを抱えて円くなりながら都を見つめた。
「でも・・やっぱり、わたしは、優ちゃん以外の人のお嫁さんになれない。だって、約束したんだもの。」
私は都の、あきれたようなため息と、ドンだけすり込まれてるの？こんなん置いていってほんまに罪な男だよ・・というつぶやきを黙って聞いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9803z/

斜め35度右後方からその声はした。

2011年12月30日22時50分発行